



高级日语 泛读教程

日本語読解チユートリアル

李智◎主编

上海交通大學出版社
SHANGHAI JIAO TONG UNIVERSITY PRESS



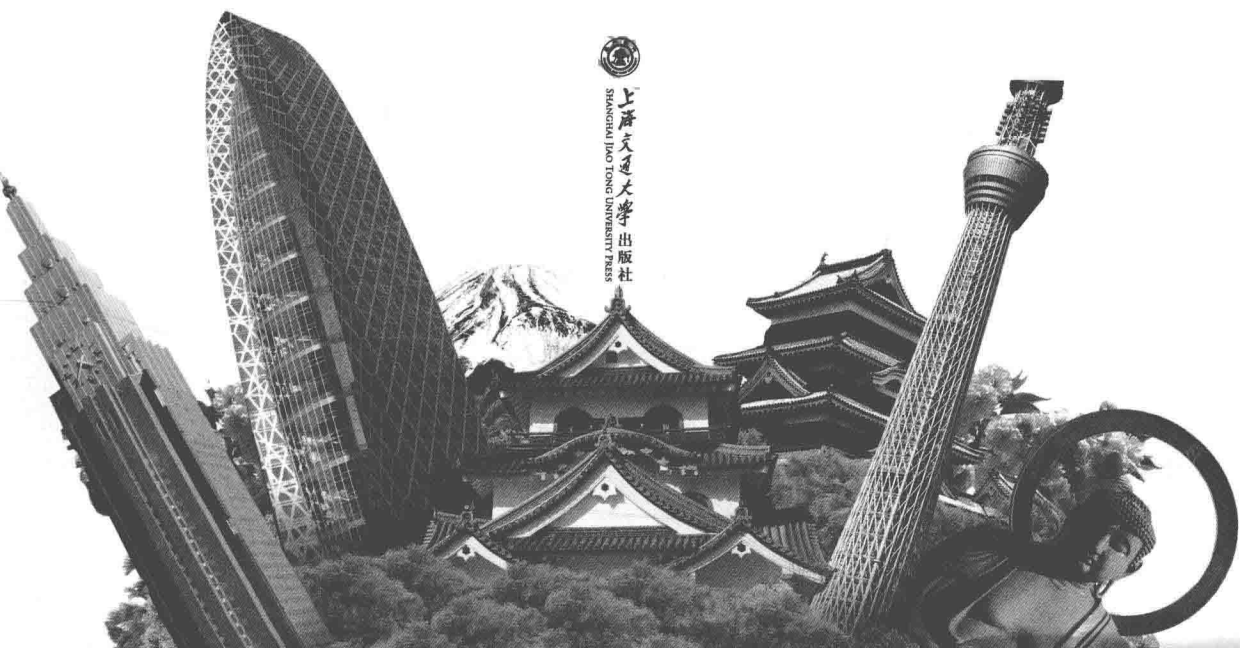
高级日语 泛读教程

日本語読解チユートリアル

李智◎主编



上海交通大学出版社
SHANGHAI JIAO TONG UNIVERSITY PRESS



内容提要

本书是针对本科日语专业泛读课程编写的教材。每课分别由课文、语法和练习等部分构成。教材收录的文章类型多样,题材广泛,包括语言、社会、文化、思想、艺术、科学等多方面的文章。文章视角新颖,反映了对于日本社会文化的新思考。本书也可用做大学日语阅读课的教材,或供有一定日语基础的日语演习者自学使用。

图书在版编目(CIP)数据

高级日语泛读教程 / 李智主编. —上海:上海交通大学出版社,2016

ISBN 978-7-313-15934-2

I. ①高… II. ①李… III. ①日语-阅读教学-高等学校-教材 IV. ①H369.37

中国版本图书馆CIP数据核字(2016)第238450号

高级日语泛读教程

主 编: 李 智

出版发行: 上海交通大学出版社

邮政编码: 200030

出 版 人: 郑益慧

印 刷: 昆山市亭林印刷责任有限公司

开 本: 787mm×1092mm 1/16

字 数: 243千字

版 次: 2016年10月第1版

书 号: ISBN 978-7-313-15934-2/H

定 价: 38.00元

地 址: 上海市番禺路951号

电 话: 021-64071208

经 销: 全国新华书店

印 张: 10.25

印 次: 2016年10月第1次印刷

版权所有 侵权必究

告 读 者: 如发现本书有印装质量问题请与印刷厂质量科联系

联系电话: 0512-57751097

前 言

《高级日语泛读教程》是针对本科日语专业泛读课程编写的教材。本教材也可用于大学日语阅读课程或有一定日语基础的日语学习者自学使用。教材具有以下特点：

(1) 收录的文章类型多样，题材广泛。教材在文章的选择上注重思想性、知识性、实用性、趣味性的结合，文章涉猎的范围广泛，包括语言、社会、文化、思想、艺术、科学等多方面的文章。读者通过学习本教材不仅可以增加语言表达方面的知识，提高阅读能力，同时也可以加深对于日本的社会文化等各个层面的认识理解。

(2) 教材中收录的文章视角新颖，对于一些日本社会文化的重要课题，例如“日本人的集团主义”“原则话和真心话”等话题从新的角度进行思考。阅读本教材可以开拓读者的视角，在语言学习的同时训练读者的思辨能力。

(3) 在教材编排上注重以学生自主学习为主，采用练习的方式引导学生阅读课文，把握文章中重要的句型和表达方式，理解重要的句子。学生通过阅读和练习可以快速掌握阅读技巧，提高阅读水平。

编者在教材的编写过程中参考了国内外大量的教材和书籍，在此深表感谢。文章收集了众多作者的作品，未能与各位作者一一联系，在此深表歉意。由于时间仓促，编者能力有限，不足之处在所难免，恳请各位专家读者不吝指正。

目 次

第 1 課	音の世界に生きる	1
第 2 課	生きている木と死んでいく木	8
第 3 課	母語の外へ出る	15
第 4 課	失敗の意味	21
第 5 課	花	27
第 6 課	建前と本音	35
第 7 課	日本人が集団主義的か	41
第 8 課	心と言葉	47
第 9 課	鼻	52
第 10 課	インターネットと社会の自由	60
第 11 課	日本的思考の原型	67
第 12 課	新しいということ	73
第 13 課	科学と感性	79
第 14 課	〈装うこと〉の倫理	85
第 15 課	日本人の座り方	93
第 16 課	ことばの危機管理	98
第 17 課	日本人の死生観を探究するための三つの扉	103
第 18 課	旅	111
練習解答		116



第1課 音の世界に生きる

幸ありて

昨年暮、一寸風邪をひいて欧氏管を悪くした。普通の人ならたいして問題にすまいこのことが、九つの年に失明を宣言されたその時の悲しみにも増して、私の心を暗くした。もし耳がこのまま聞こえなくなったら、その時は自殺するよりほかはないと思った。音の世界にのみ生きて来た私が、いま耳を奪われたとしたら、どうして一日の生活にも耐え得られようかと思った。幸い何のこともなく全治したが、兎に角今の私には、耳のあることが一番嬉しくまた有難い。

私は、生れて二百日くらいから眼の色が違っていたそうであるが、それが七つの頃から段々見えなくなった。その為に学校に上れなかったが、それが当時の私には何より残念だった。めくらといわれるのがどうにも口惜しくてならなかった。それで無理に見えるふりをして歩いて、馬力につき当たり泥溝に落ちたりして怪我をしたものである。が、結局諦めねばならなかったので、九つの六月から箏を習いはじめた。音楽は元来非常に好きだったので、間さえあれば箏に向っていた。しかしその頃は——そしてずっと後年まで、やはり時には、眼が見えたらなあと思ふ寂しく思ふようなこともないではなかった。

だが、しかし今日では、年も取ったせいであろうが、眼の見えぬことを苦にしなくなった。時々自分が眼の悪いということをおぼえていることさえある。「ああ、そうそう、自分は眼が見えなかったんだな」と気がつくようなことがしばしばある。というのは、物事は慣れてしまうと、案外不自由がないものだから、私なども家の中のことなら大抵、人の手を借りることなしにやれる。それだけにまた一しお、この耳とそして手の感触をありがたいものに思ふのである。

私は、眼で見る力を失ったかわりに、耳で聞くことが、殊更鋭敏になったのである。普通の人には聞こえぬような遠い音も、またかすかな音も聞きとることができる。



そして、そこに複雑にして微妙な音の世界が展開されるので、光や色に触れぬ淋しさを十分に満足させることができる。そこに私の住む音の世界を見出して、安住しているのである。

声を見る

まるで見当違いの場合もないわけではないが、その人の風体を見ることのできぬ私どもは、その音声によってその人の職業を判断して滅多に誤ることがない。

弁護士の声、お医者さんの声、坊さんの声、学校の先生の声、各々その生活の色が声音の中ににじみ出てくる。偉い人の声と普通の人声とは響きが違う。やはり大将とか大臣とかいうような人の声は、どこか重味がある。

年齢もだが、その人の性格なども大抵声と一致しているもので、穏やかな人は穏やかな声を出す。ははあ、この人は神経衰弱に罹っているとか、この人は頭脳のいい人だなというようなことも直ぐわかる。概して頭を使う人の声は濁るようである。それは心からだとか不純だとかいうのでなく、つまり疲れの現れとでもいふべきもので、思索的な学者の講演に判りよいのが少く、何か言語不明瞭なのが多いのがこの為ではないかと思う。

同じ人でも、何か心配事のある時、何か心境に変化のある時には、声が曇ってくるから表面いかに快活に話していても直ぐにそれとわかる。初めてのお客であっても、一言か二言きけば、この人は何の用事で来たか、いい話を持って来たのかそれとも悪い話を持って来たか、何か苦いことをいいに来たかというようなことはよくわかるものである。また肥った人か痩せた人かの判断も、その声によって容易である。例えば高く優しくとも肥った人の声は、やはりどこかに力があるものだ。

声ばかりではない、歩く足音でそれが誰であるかということがよくわかる。家の者が外出から帰って来たのか、客であるか、弟子であるか、弟子の誰であるか、大抵その足音でわかる。道を歩いていても、それが男であるか女であるかは勿論、その女は美人であるかどうかやはり足音でわかる。殊に神楽坂などという粹な筋を通っていると、その下駄の音であれば半玉だな、ということまでわかる。それは不思議なくらいよくわかる。ところが、この間道を通る人の靴音をきいて、傍の家人に今のはお巡りさんかと尋ねてみたら、「いいえ女学校生です」とのことであった。この頃の女学生は活発な歩き方をするので、私の耳も判断に迷うことがある。



騒音もまた愉し

それから、ふだんは普通の人には勿論、私どもにさえも聞こえないような電車の音やいろいろな街の雑音が聞こえてくることがしばしばある。それは丁度、海岸で遠い波の音を聞くようにかすかに低いものであるが、それを私どもの耳ははっきりと聞くのである。すると不思議なことに、それから二三日中の間に必ず天気が変わる。つまり私どもの耳は天気予報の役目も務めるわけで、近頃は警視庁なんかでも、騒音ということを非常に喧ましく取締っているようだが、また事実騒音も聞き方によっては非常に癩に障るものであるが、しかし音の世界に生きる私どもは、波の音を聞く感じを以て電車の音を聞く時、街の騒音にもそこに一脈の愛しさを覚えずにはいられないのである。

やがては、誰も騒音も何も聞こえぬ所へ行かねばならぬのだから、せめて生きている間は、騒音でも何でも聞こえることに感謝しなければならぬと思う。

それが、音の世界に生きる私共の——少くとも私の「こころ」である。

先天的の失明でなかったから、私には色というものの記憶が少しはあって、作曲するにはやはりその色を思い出す。はっきりは出ないが、何かやはり眼に浮かんで来るものがある。それと音とが一緒になるのである。どうとって具体的にはいえないが、音にもやはり色はあるもので、あの西洋の作家なんかでも、ドレミファをそれぞれ自分の頭の中でいろいろ勝手に色を出している人があるそうだし、極く普通に黄色い声などというのもそれであると思う。

自然の音は、私共にとって最も親しいものである。風の音、雨の音、虫の音、小鳥の囀る声、何一つとして楽しくないものはなく、面白くないものはない。

同じ風でも、松風の音、木枯の音、また撫でるような柳の風、さらさらと音のする笹の葉など、一つ一つに異った趣きのあるものである。

私は雨の音が殊に好きである。とりわけ春の雨はよいもので、軒から落ちる雨だれの音などきいていると、身も心も引き入れられてしまうような感じがする。

虫の音にも、まつむし、鈴虫、くつわむし、それぞれ趣きがあってよい。秋の夜長を楽しませてくれるこれ等の小音楽師達に、私は心からの感謝を捧げたく思う。

私はまた、小鳥が好きで、都会の中に住んでいると、自然の森や林で自由に囀る鳥の音を聞かれぬことは淋しい。私は作曲に興味湧いて、自然の音にひたりたいと思う時などは、いても立ってもいられない程、懐しい思いがする。

自然の音はまったく、どれもこれも音楽でないものはない、月並な詩や音楽に現わすよりも、自然の音に耳をかたむける方が、どれだけ勝れた感興を覚えるか知れない。私



たちがどんなに努力しても、あの一つにも勝れたものは出来ないであろう。

音に生きる

私は子供の時には非常に負嫌いで、喧嘩しても議論しても負けるのが何より厭だった。それがこうして音の世界に生きるようになってからは、不思議に気持が落ち着いて来て、負嫌いどころか負けることが好きなくらいになった。大概のことは人に勝たしてあげたいと思うのである。

時にはそれを卑怯のようにも思うけれども、決して人と争わぬ。人の意見に反対しない。若い頃には直ぐ怒ったものであるが、この頃はどうしたものか、腹が立たなくなった。時に、弟子に対して怒ったふりをすることはあるが、心から怒るということはない。

芸に就いても、かつては他流の人とでも弾く時には、何か一種の競争意識というか、戦闘気分といったようなものに支配されたものであるが、今日はそうでない。誰とやっても静かな気持である。先ず人を立ててその中に自分自らも生きようと希う気持だけである。

私が一番苦々しく思うことは、相手の人によって言動に階級をつけることである。人間はどうしてああいうことをせねば気がすまぬのか。それは偉い人には敬意を表さねばならぬのは勿論だが、目下の者だから、貧しい者だからといって何故威張らねばならぬのか。私にはそういう気持がわからない。それでよく弟子達に、「先生は誰にでも頭を下げるから威厳がない」と叱られたりするが、しかし私は自分の値打を自分で拵えて人に見せようというような気持にはなれない。

これは何も私が修養が出来ているかのように仄かすのではない。およそ音の世界に生きる者のすべてが自然に持つ、一つの悟りとでもいうべき心境であろう。有難いと思う。私はいま別に信仰というものはないが、強いていえば、私にとって音楽は一つの宗教である。

(宮城道雄『心の調べ』より)

言葉の表現と知識のポイント

1. 癩に障る

- ① 人前で恥をかかされたのが癩に障ってたまらない。



② 彼のどうでもいい態度に癪に障った。

2. 見間違い

① きみの質問が見間違いだ。

② 見間違いもはなはだしい。

③ 私と彼が交際していると思われているようだが、見間違いもいいところだ。

3. ～に浸る

① お父さんが毎日酒に浸る。

② 大学の入学通知書をもって彼が毎日喜びに浸っている。

③ 水道が破裂して床下まで水に浸ってしまった。

練習

一、次の単語の読み方を確認してください。

- | | | | |
|------------|------------|-------------|-------------|
| 1. 暮() | 2. 一寸() | 3. 欧氏管() | 4. 失明() |
| 5. 宣言() | 6. 自殺() | 7. 馬力() | 8. 全治() |
| 9. 口惜しい() | 10. 泥溝() | 11. 箏() | 12. 後年() |
| 13. 物事() | 14. 不自由() | 15. 感触() | 16. 鋭敏() |
| 17. 複雑() | 18. 安住() | 19. 風体() | 20. 誤る() |
| 21. 大将() | 22. 元来() | 23. 神経衰弱() | 24. 罹る() |
| 25. 濁る() | 26. 心境() | 27. 快活() | 28. 用事() |
| 29. 足音() | 30. 弟子() | 31. 下駄() | 32. 半玉() |
| 33. 雑音() | 34. 騒音() | 35. 愛しい() | 36. 癪() |
| 37. 作曲() | 38. 囀る() | 39. 撫でる() | 40. 鈴虫() |
| 41. 木枯() | 42. 松風() | 43. 感興() | 44. 月並み() |
| 45. 勝れる() | 46. 負嫌い() | 47. 卑怯() | 48. 戦闘() |
| 49. 階級() | 50. 敬意() | 51. 威張る() | 52. 威厳() |
| 53. 値打() | 54. 拵える() | 55. 修養() | 56. 仄めかす() |
| 57. 一脈() | 58. 喧しい() | 59. 夜長() | 60. 希う() |



二、次の文を中国語に訳してください。

1. 音の世界にのみ生きて来た私が、いま耳を奪われたとしたら、どうして一日の生活にも耐え得られようかと思った。
2. めくらといわれるのがどうにも口惜しくてならなかった。それで無理に見えるふりをして歩いて、馬力につき当たり泥溝に落ちたりして怪我をしたものである。
3. というのは、物事は慣れてしまうと、案外不自由がないものだから、私なども家の中のことなら大抵、人の手を借りることなしにやれる。それだけにまた一しお、この耳とそして手の感触をありがたいものに思うのである。
4. 私は、眼で見る力を失ったかわりに、耳で聞くことが、殊更鋭敏になったのであろう。普通の人には聞こえぬような遠い音も、またかすかな音も聞きとることができる。そこに複雑にして微妙な音の世界が展開されるので、光や色に触れぬ淋しさを十分に満足させることができる。そこに私の住む音の世界を見出して、安住しているのである。
5. まるで見当違いの場合もないわけではないが、その人の風体を見ることのできぬ私どもは、その音声によってその人の職業を判断して滅多に誤ることがない。
6. 同じ人でも、何か心配事のある時、何か心境に変化のある時には、声が曇ってくるから表面いかに快活に話していても直ぐにそれとわかる。
7. 事実騒音も聞き方によっては非常に癩に障るものであるが、しかし音の世界に生きる私どもは、波の音を聞く感じを以て電車の音を聞く時、街の騒音にもそこに一脈の愛しさを覚えずにはいられないのである。
8. やがては、誰しも騒音も何も聞こえぬ所へ行かねばならぬのだから、せめて生きている間は、騒音でも何でも聞こえることに感謝しなければならぬと思う。
9. 私は作曲に感興が湧いて、自然の音にひたりたいと思う時などは、いても立ってもいられない程、懐しい思いがする。



10. 私が一番苦々しく思うことは、相手の人によって言動に階級をつけることである。
人間はどうしてああいうことをせねば気がすまぬのか。

11. これは何も私が修養が出来ているかのように仄かすのではない。およそ音の世界に生きる者のすべてが自然に持つ、一つの悟りとでもいうべき心境であろう。



第2課 生きている木と死んでいく木

春の初めに、近所の大きな木が死んだ。死んだと言うべきか殺されたと言うべきか伐り倒されたと言うべきか、迷っていた。大きな事件だったが、わたしは語る気になれなかった。今やっと語りたくなった。

コショウの木だ。ウルシ科のカリフォルニアコショウノキ。このへんにいくらでも生えている。見慣れているのですぐわかる。荒い肌で、ヤナギみたいな、シダみたいな、垂れ下がる葉に、赤い小さい実が鈴なりに生っている。それが、太く大きく育って、道におおいかぶさっていたのだ。

その木はずっとそこにあった。通るたびに感嘆した。鬱蒼ということばを思い出した。鬱々とした陰がうまれて、何もかもが蒼く見えた。通るたびに子どもたちがトトロのメイちゃんの声色をつかって、「木のとんねるー」と言ったものだ。これだけ育つには百年近い年月が、と百年近く生きてきたつれあいはいつも共感をこめて同じことを言ったものだ。家族の誰もがそれぞれの思いで愛着してきた木だった。木の裏には小さな家が数軒建っている。貸し家然としている。庭もなく塀もない。木の陰に隠れているのである。家より大きい木はずっとそこにあり、鬱蒼と道におおいかぶさっていた。

春の遅い朝だった。外に出かけていった娘が帰ってくるなり、木が切り倒されている、と。

とうとつすぎてリアルさがなかった。ああこういうことが起きるのだと前からわかってたような気がした。何度もこういう経験をしてきたのを思い出した。いつもわたしは何もできなかったと思い出した。何度も何度も、死んでいく木たちを助けられずに情けない思いをしたのを思い出した。

夕方はピンク色だった。東の空も西の空もはなばなしく染まりぬいた。

わたしは、犬たちを連れてそこまで歩いていった。昔はよくここを歩いた。当時はまだ犬が若く、毎日遠出をしていたのである。その頃は、途中で犬のいる家が二軒あった。いつも吠えられた。わたしが連れていた犬は向こう見ずの若犬で、よその犬が吠え



れば、ひとのテリトリーだろうが何だろうがおかまいなしに吠え返した。このたびもまた吠えられたが、昔若犬だった犬は、今やよぼよぼの婆犬になっていて、よその犬の存在なんてどうでもよくなっておる。うちの犬が反応しないので、よその犬の吠え声を落ち着いて聞くことができ、その結果、威嚇と思っていた声が、実は自分を見ろ、見ろ、という見せびらかしだというのに気づいた。

道すじにはアカシアが何本もあった。どれも咲きかけていた。オキザリスも一面に広がっていた。花がつぼんでいるのは夕方だったせいだ。多肉植物の植えられた庭があった。塀には蔓性のゼラニウムが無尽に這いのぼり、花を咲かせていた。

道の上に、木は無くなっていった。道は広々と明るくなっていった。そしてなんとも、がらんとしていた。

枝や幹を細かくかち割って、粉碎機にかけたようだ。メキシコ人たちが木屑を掃いていた。かれらはその住人かもしれないし、雇われて伐採を手伝っただけかもしれない。

木は跡形も無くなっていった。跡地には細かい、砂のような木屑がこんもりと盛り上がっていた。跡地は小さかった。六畳くらいしかなかった。こんな小さなところからあの巨大な木が生えだして、身を支えていたのかと思うと不思議であった。歩道も、もりもりと掘り起こされてあった。

ふと、足下に葉が散り落ちているのに気がついた。歩道の上にも、車道の上にも、葉が散らばっているのにも気がついた。切り倒される瞬間に葉が散ったのだ。それから倒された木が揺さぶられ、引きずられて、解体されていくときに、あたりいちめん葉が降りしきったのだ。

木のことがあってから、しばらく哀しくてその道を通れずにいたのである。それからしばらくして日本に帰った。春のほとんどもを熊本で過ごした。ちょうど妊娠中の長女のカノコも夫といっしょにやってきていた。それで、阿蘇の高森に連れて行って、大木を見せたいと考えていた。これは生きている木の話である。

熊本の高森というのは、阿蘇のすそ野である。熊本空港からほんの四十分だ。人家があって田畑がある。水が湧いて、あちこちに水源がある。商業化されつくした、みにくいのもあれば、地元の人が生活に使っている、共同井戸みたくのものもある。

ちょっと遠くまで行くと、木々のなかの奥まったところにひっそりしているものもある。水の色は水面に映る木々ですっかり緑になり、水面のまんやかに水神様の苔むした像が突き出ている。のぞきこむと池の底はびっしり苔でおおわれて、魚が走る。あちこちから水が湧きあがる。湧きあがるところで水が動く。そういう水源もある。山をのぼりか



けたところの崖の横っ腹から、ちょろちょろと流れ出ている水源もある。

あ、いや、水の話をしているのではなかった。木の話だ。高森に一本の年取ったサクラがある。一心行のサクラという。一心に行をする。そういう意味のこめられた木のようだ。その近くに、高森殿のスギと呼ばれる大スギもある。

それで、カノコ夫婦を空港から連れ帰る途中に、一心行の大ザクラを見に立ち寄った。花期は過ぎ、花期の間じゅう催されていたたましい桜祭りも終わって、出店も舞台も取り払われているところだった。大ザクラはすっかり葉だらけだった。ヤマザクラとソメイヨシノの違いは、ソメイヨシノは花が終わってから葉が出るが、ヤマザクラは花と同時に赤い新芽が吹き出すところだと何かに書いてあった。

妊婦のカノコは夫と手をつないで、大ザクラの周囲を歩き回った。ごつごつと古びた枝に残っているサクラの花よりも、古ザクラの根元に吹き出している、スマレやオオイヌノフグリやカラスやスズメのエンドウたちに目をやって、かわいいの、なつかしいのと、夫に話しかけていた。

帰りがけにわたしは考えた、大スギにも立ち寄れるかどうか。大ザクラの前の道をほんの三十分走れば、道のほりに見過ごすための看板ですといわんばかりの小さい看板がひっそりと立っているところに着く。行く手に小さな門がある。閉まっている。それを開けてなかに入る。この門は牛が逃げないようにするためだ。なかに入ると、牛の糞があちこちにある。前方に木立がある。鬱蒼として、湿って暗い。カズラやシダや苔がどこもかしこもおおっている。そのなかに無理矢理入りこんでいくと、そこに在るのだ、大スギが。根っこのところから二つに分かれている。上に伸び、つかえて下に垂れる。そのうちに木みずからがみずからを包みこむ。そのうちに見ているわたしたちのこともすっぽりと包みこむ。そういう木だ。

でもどう計算しても時間がなかった。カノコたちは熊本に着いたばかりで、わたしは妊婦を家に連れて行って、休ませなくちゃならなかった。出がけに父の具合が悪そうだったから、父のところにも急いで帰らなくちゃならなかった。予定では、三日後にまた二人を阿蘇に案内して、水源と火口を見て、温泉に入ろうと思っていた。そのときに大スギも見ようと。

ところがこの翌日に父が死んだ。父はカノコたちに会って、カノコの夫に、ないすとうみーちゅーと言った。それから妊婦のおなかと自分のおなかを比べて笑った。父はすっかりおなかの筋肉がしなびて内臓を支えきれなくなって、下腹だけ膨らんだおなかになっていたのだ。その夜、父の具合がさらに悪くなって次の日に死んだ。わたしたちはばたばたした。病院や、葬儀社や、親戚への連絡や。阿蘇行きは、当然のことながら中



止である。葬儀社と銀行と病院に立ち寄った帰り、わたしはせめてもと思って、カノコたちを「寂心さんの樟」に連れて行った。

熊本市内から田原坂に行く田園地帯にさしかかる。向こうに樟の森が見える。近づくにつれ、森と思ったのはただ一本の大樟の繁みであることがわかる。整備されて公園になっているが、誰もいない。駐車場から樟に向かう道に、スマレやオオイヌノフグリやホトケノザや各種のエンドウたちが咲き群れていた。

大樟の下を、カノコたちは手をつないで歩きまわった。わたしはクスノキの下に備えてあるベンチに寝転がった。上を見て、木を見て、自分の手を見て、空を見た。薄曇りの空であった。しわだらけの大きい大きい木であった。しわだらけの疲れて衰しい手であった。見つめているうちにひとつ大きな間違いをしていたのに気づいた。この時期のクスノキが赤いのは新芽だとばかり思っていた。そうじゃなかった。古い葉が赤くなり、それが新芽の緑と入り交じっているのである。赤い葉が、風に吹かれて、葉桜になりかけたときの花びらのように、いちめん降りそそいだ。

もう一つ、語りたい木がある。カリフォルニアにある木の話だ。

あれからわたしはカリフォルニアに帰った。そしたら、うちの近所の、末っ子のトメの学校から家に帰る道すじで、この辺では見慣れないが、なんとなくつかしく思えてしょうがない花ざかりの木があるのに気がついた。花は紫で、花卉は細くて、十字みたいにクッキリと見える。それが木全体をおおっている。そしてその花の下にぴかぴかした緑の葉が隠れている。

あんまりきれいなので、そこを通るたびに車の速度をゆるめて感嘆していたが、ある日とうとう車を停めて、トメに花と葉を少しづつちぎり取ってくるように言いつけた。そして確信したのだ。これはセンダン。アジア原産、熊本にも原産で、どうしてこんな太平洋のこっち側にあるのかわからないが、これは、ムクロジ目のセンダン科のセンダン。漢字で書くと栴檀。

センダンの木は、成長が早い。熊本の坪井川の河原に二十年ほど前に生え出したやつは、もう大木になって陰を作っている。自生するだけじゃない。公園のあちこちに植えられてある。冬には葉が落ちてむき出しになった枝に黄色い実が垂れ下がる。

長い間ハゼノキと思いこんでいた。ハゼノキは蠟が取れる。だから肥後藩が奨励した。たしか大津から阿蘇を抜けて大分に出る旧街道沿いに植えられていた。昔、熊本に引っ越して来たばかりのとき、あれはハゼノキと人に教えられた覚えがある。

ハゼノキじゃなくてセンダンとわかったのは三年前だ。その四月に母が死んで、四月五月と熊本とカリフォルニアを行ったり来たりした。そのときあちこちで見た花ざかり



のセンダンの木を、その名前を、確認していったのだ。

ハゼノキとセンダン、実はそっくりだが、花が違う。ハゼノキの花は目立たないが、センダンの花は、五月になるとはなやかに咲きほこる。摘んでみてわかった。目が覚めるほどの芳香があった。たった二ひらの花のために、鋭くて、力強い芳香が、家じゅうにみちみちた。

今、センダンは、熊本の坪井川の河原のあそことあそこで(場所を特定できる)、公園のあそこで、いっぱい花を咲かせている。もうそこには誰もいない。わたしもいなければ、父もいない、母もいない。そう思うとぽっかりと空虚である。でも、見なくてもわかる。あそこで、センダンは風に吹かれて散り落ちておる。河原の繁みのなかでは雄のキジが雌を恋しがって鳴いておる。四月に咲きはじめていたノイバラは、今は爛熟しきって、河原じゅうが天花粉をはたいたみたいに白くなっておる。

(伊藤比呂美『木霊草霊』より)

言葉の表現と知識のポイント

1. 向こう見ず

- ① 向こう見ずな行動をとって、自らの安全も脅かされるよ。
- ② あの人が向こう見ずな性格なので、大役を任せられない。

2. ～がけ

- ① 蘇州からの帰りがけにお土産を買ってきた。
- ② 大学への行きがけに郵便局に寄った。

練習

一、次の単語の読み方を確認してください。

- | | | | |
|-----------|-----------|------------|------------|
| 1. 鬱蒼() | 2. 感嘆() | 3. 鬱々() | 4. 声色() |
| 5. 共感() | 6. 愛着() | 7. 塀() | 8. 遠出() |
| 9. 威嚇() | 10. 無尽() | 11. 木屑() | 12. 跡形() |
| 13. 跡地() | 14. 大木() | 15. 苔むす() | 16. 横っ腹() |
| 17. 花期() | 18. 新芽() | 19. 火口() | 20. 筋肉() |
| 21. 下腹() | 22. 樟() | 23. 葉桜() | 24. 花卉() |